信毎歌壇

小池　光選

起きがけに手指運動懇にペットボトルのフタ開けるため　（飯綱町）小林　紀子

逃げられぬ人もいるらん目を閉じてラジオ聞きつつ必死に祈る　（東御市）広沢里枝子

ひとり居てふりつぐ雨を眺めつつ「雨の慕情」を口ずさみたり　（上田市）甲田　隆登

注連縄を飾りわらくず掃きしのち「よし」とうなづく夫の顔よし　（飯田市）原　敏子

父・母の暮らしていたるふる里の空を跨ぎて大きな虹立つ　（長和町）羽毛田　栄

空爆で死にて廃墟の星となりしガザの一万の児らの慟哭　（佐久市）篠原　敬子

この先に何が待とうが怯むまじひたすら生きて八十六歳　（佐久市）臼田宇多子

小学校の同級生と並びたり成人式の主催者席に　（長野市）原田　浩生

大雪の朝も欠かさず届きくる新聞嬉し深き足跡　（飯山市）小野沢竹次

コーヒーに一滴垂すブランディー正月三日の午後のひととき　（豊丘村）はやしのもりんど

佳作

塒へと急ぐ鴉の群抜けて疲れし一羽休む電柱　（長野市）小日向栄子

孫たちの忘れ物なり片方のくつ下ひとつ洗っておこう　（佐久穂町）石田　弘子

選評

第一首、年を取ってくるとペットボトルのふたを開けるようなことも大儀になってくる。そのため起きがけに手指の運動をかかさない。小さなことだが切実である。第二首、このたびの能登の地震は大きなショックを与えた。ラジオの絶叫に逃げたくても逃げられない人がいることを思う。第三首、八代亜紀さんの急逝を惜しむ。ヒット曲「雨の慕情」をふと口ずさむ。かなしいニュースが続く。

小島　なお選

この次も会ひませうといふひとの目は諏訪湖に映る夕焼けとなる　（塩尻市）藤森　円

被災地にやっと電気のついた時「誰かに抱かれているようだ」という　（飯綱町）小林　紀子

雪はりつく大けやきにもさつきにも校舎のベルは鳴りとどくかな　（駒ケ根市）三岳みちよ

好もしき若人連れ来し孫娘のあいさつ地震に揺れつつ受けぬ　（小川村）稲葉　利郎

登校の小五と中二が投げかける線香花火のような視線を　（長野市）宮崎　久子

永遠に続く冬などないからに葉牡丹買ってあんまん買って　（佐久市）水間喜美子

親指を曲げたかたちと手影絵で能登を教えき友は誇りて　（須坂市）東島　雄二

ニュース見る大人の顔を幼子は無言のままにじっと見つめる　（辰野町）矢島あさ子

「異常なし」の診断受けて長野駅立ち喰いそばの天玉うまし　（長野市）山口才智雄

風冴ゆる御宝田遊水池へと戻る夕日の色の白鳥　（小諸市）加藤　陽介

佳作

紅白の南天かなし正月が過ぎし日常静かに眺む　（安曇野市）西沢　美幸

すっぽりと穴にはまりし忘却をメモ読み返しやっと抜け出る　（上田市）山越　肇子

選評

第一首、「この次」が本当に来るのかはわからない。けれど、美しく燃える諏訪湖を見つめる２人の今を信じたい。第二首、明かりのある安心感と頼もしさ。心底の実感のこもる言葉を忘れることができない。第三首、雪をまとってしんと眠るけやきやさつき。冷たく張りつめた植物の聴覚を思う。第四首、家族へあいさつする緊張の場面。大事なタイミングでの天災にそれどころではなくなってしまった。

米川 千嘉子 選

降りてのち巡回バスに深々と頭を下げる老女に吹雪　（飯山市）市村紀久子

「雪色」が気に入り誂えたる着物晴れわたる日の初釜へゆく　（長野市）原田りえ子

「好きです」なんて言ったことない我が人生されども愛し愛され生きて　（飯綱町）小林　紀子

元日にアラート響く能登地震揺れ感じつつすき焼き食べぬ　（伊那市）赤羽　正彦

登校の道に雪かきする人ら白杖持つわれにも声かけくるる　（千曲市）上原　博司

わが三味に「瀧」と名付けてその飛沫浴びる如くに寒稽古する　（東御市）広沢里枝子

妻の穿く絣のもんぺ、求めたる輪島朝市永久ぞ心に　（伊那市）堀米　好美

「頑張って！」干し物しながら空を見る雲の向こうに能登半島が　（東御市）宮坂美代子

武器に基地五輪万博裏金かどうか災害に備えてくれぬか　（松本市）美甘　歓

一合の酒に夕餉をしまひけり明日の介護の力をためて　（長野市）丸山　祐司

佳作

野沢菜や酢・醤油・味醂・塩入らず友に教わりシャキシャキと食む　（小諸市）尾沼美枝子

大寒の滑る雪道怪我怖くラインで済ます寒中見舞い　（木島平村）日台　敏夫

選評

第一首、雪国の厳しさと感謝の心でそこに生きてきた人の姿が一場面に象徴的に収まった作。第二首、「雪色」という着物の色がある。作者は青い冬空をゆく大きな雪片のよう。「初釜」との取り合わせも新鮮。第三首、「好きです」という言葉がなくても互いに愛を実感できているのだ。すばらしい。第四首、驚きや不安はありつつ食べるのを止めるほどでもない。何ともいえないすき焼きの味。